

特集／府民公開シンポジウム・大阪大会（一九九二年一月七日）

高齢化社会における親子

——親子関係を問い直す——

コーディネーター

有地 亨

（聖心女子大学）

波平 惠美子

（九州芸術工科大学）

井ヶ田 良治

（同志社大学）

司 会

開会の挨拶

大阪大会実行委員長

山中 永之佑

（追手門学院大学）

比較家族史学会会長

大竹 秀男

（神戸大学名誉教授）

井ヶ田 皆さんおはようございます。土曜日の朝早くから今回の催しにおいていただきまして本当にありがとうございます。

これから比較家族史学会の一〇周年の記念事業実行委員会と、府民公開シンポジウム実行委員会との共催で、大阪府のご協力をいただき、シンポジウム「高齢化社会における親子―親子関係を問い直す」を始めたいと思います。たくさんの方にいろいろご協

力いただきまして最初に心からお礼申し上げます。

これから午前中にお二方、午後にお二方のご報告をいただきまして、その後で討論というふうに進めたいと思います。始めに皆さんにお願いがあります。一つは比較家族史学会で作りました統計集を皆さまがこれからも何かの時に役に立てていただきますようにとお渡しをさせていただきます。それから今日ご報告いただきますためのレジメを綴じたものが準備してございますのでお受け取りいただきたいと思えます。それから会を進める時の一つのお願いでございます。いろんな方からできるだけご発言いただきたい、ご質問を出していただくことが望ましいので、質問用紙が受付にございます。午前中につきましてはお昼の時間に受付の所に箱がございますので、その箱の中へ記入したものをに入れていただければコーディネーターのほうでいろいろ整理をしてお図りする

ことになるかと思えます。そんなことで夕方まで大変長い時間でございますけれどもよろしくご協力をお願いしたいと思います。

最初の壇の上に並んでいらっしゃる先生方を簡単にご紹介いたします。中央のこちらのほうからコーディネーターの有地亨先生、聖心女子大学の先生でいらっしゃいます。それから同じく波平恵美子先生、九州芸術工科大学の先生をしていらっしゃいます。それから向こうへまいります、ご報告をしていただきます神戸大学名誉教授の大竹秀男先生、日本赤十字武蔵野女子短期大学の高橋博子先生、ドイツ日本研究所にいらっしゃいますウルリッヒ・メーワルト先生、それから大阪府立の砂川厚生福祉センターの常恵先生でございます。よろしくお願いいたします。それからこちらの方で片多順先生、それからもう一人池田敬正先生、お二人にコメントをお願いしてございます。それではご紹介を終わりますして、早速始めさせていただきます。最初にまず開会のご挨拶ということで大阪大会、今回の実行委員長の山中永之佑先生、追手門学院大学教授でいらっしゃいますが、一言ご挨拶をお願いしたいと思います。よろしく。

山中 ただ今ご紹介いただきました追手門学院の山中であります。ご承知のように国際社会の中で、我国は経済大国といわれながら、高齢化社会が到来して来ているのであります。しかしながら、これまでご承知のように、日本の老人を取り巻く環境は極めて厳しい状況のもとにあります。日本社会の現在繁栄していると言われ

る中で、直接、間接に、そういった繁栄に貢献して来た老人をこのような現状の恵まれない環境の中に置いておいてよいのか、決してそうではないというように思うのであります。こういった考えから比較家族史学会では、一〇周年記念行事として「親子関係を問い直す」という公開シンポジウムを計画したわけであります。東京大会の場合は、子育ての問題を論じたのでありますけれども、大阪では高齢化社会における親子の問題を取り上げようではないかということになりました。たまたま私が大阪に住んでいることもありまして、大阪大会の実行委員長を引き受けさせていただいた次第であります。この大会を開催するにあたりましては厚生省大阪府、それから大阪府地域福祉推進財団からもご後援をいただきましたし、企業からも協賛をいただきました。おかげで、この大会を開くことが出来たことを感謝いたしている次第であります。高齢化社会における親子の問題を取り上げることは、非常に難しい問題であります。したがって、この大会を通じて、完全に高齢化社会における親子の問題について解決が得られるというものではないと思えます。しかしながら、ご報告していただく中で論じられると思えますけれども、歴史的に、あるいは国際比較的に、あるいは実態分析的に、こういった問題を究明することによって、一歩でも、このような問題の解決に近付くことが出来ればと願っている次第であります。長時間大変恐縮でありますけれども、最後までこのシンポジウムにご参加いただき、討論に加わっていただければありがたいと思えます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ます。甚だ簡単でありますが、ご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

井ヶ田 どうもありがとうございます。それでは次に比較家族史学会の会長をしていらっしやいます大竹秀男先生に一言ご挨拶をお願いしたいと思います。

大竹 おはようございます。大竹でございます。今回のシンポジウムは我々比較家族史学会と大阪府地域福祉推進財団との連帯によりまして、大阪府民各位と高齢化社会における親子問題についてディスカッションしようという計画を立てまして、本日のこの催しになったわけでございます。

私共の比較家族史学会というのは、このリーフレットにも書いておりますけれども、社会科学と人文科学のいろんな専門分野の先生が集まって作った非常に特色のある学際的な学会であります。いろんな専門の方がこの頃は家族の問題を研究されている。今や家族の問題というのは一つの専門分野だけではとらえられない。いろんな角度からこれを考えてみなければならぬ。そういうことであるような専門分野の方が研究をされているということでありまして、それらの専門を異にする家族研究者が集まって自然に出来上がった学会であります。一〇年経ちました。一〇周年記念として何をやるか。そこで我々が考えたのは、今日は家族の断絶、特に親子の断絶という極めて深刻な状況にあり、超高齢化社会に

なったならばこういう親子関係はどうなっていくのか、そういう不安というものを多くの人がもっている、親子関係を問いただす必要がある。そう考えまして親子問題を取り上げたわけですが、これは高齢社会、高齢化社会ということの問題だけでなくもう一つの大きな問題がある。それは、子どもの人権に関して国際連合で採択しました子どもの権利条約、我国ではまだこれを批准しておりません。けれどもこれも実態を調査してみると意外に子どもの虐待とか、いろんな子どもの人権が侵されている。そういう事実があらさまになってきました。そこで今年の六月にはそういう子どもたちの権利の問題、子どもたちの世界はどうなっているかという視点から親子問題を取り上げました。

ですから、子どもに対して今度は年をとった親と子の問題、それをこのシンポジウムでは更に検討してみようということになったわけです。こういうことで今回のこのシンポジウムの企画が行われたわけですが、私自身すでに高齢化の渦中にある高齢者でございます。この高齢化の問題というのは、実は私達現在の年寄りの問題であるよりもむしろ若い世代の方々の問題であろうかと思えます。ですからここで我々が現実が高齢社会の渦中にあるいろいろな問題に直面していると同時に若い人達にこれから起こって来る問題というものを、深刻な問題がこれほどあるんだということ認識して、親子関係の将来についての考え方をはっきりさせなければならぬ。その材料を本日のシンポジウムが提供するというふうにお考えいただきたい。このシンポジウムでは

基調報告は皆さんの議論を引き出す材料でございます。どうか会場の皆さんからいろんなご意見を出していただきまして活発な議論をしていただくことを望んでおります。それだけが私の皆さんに対するお願いでございます。どうぞよろしくその点ご協力いただきたいと思ひます。これをもって挨拶に代えます。

井ヶ田 どうもありがとうございます。うっかり私、自己紹介するのを忘れておりました。今日進行係をさせていただきます同志社大学におります井ヶ田でございます。よろしくご協力お願いしたいと思ひます。それでは早速始めさせていただきます、まず最初に趣旨説明ということで聖心女子大学の有地先生からご説明をいただきますと思ひます。ではよろしくお願ひいたします。